

一筆啓上

作左通信



第二二〇号 令和五年十一月一日(月)発行

「家康と重次 そして日本」

六ツ美西部小学校 校長 寺島 真澄

NHK大河ドラマ「どうする家康」の放映も最終クールに入った十月。松本潤扮する家康も白髪交じりになり、泣き虫家康から天下人家康へと進化してきました。この放送はあくまで史実に基づく「ドラマ」で、実際の記録とは異なるようです。とはいえ、歴史書こそ、時の権力者の都合に合わせて書かれたものであり、本当の処は誰も分かりません。案外と、大河ドラマのファンタジーが事実に近いのかも・・・と思います。

秀吉の母、大政所が人質として岡崎城に入城する場面が放映されました。その中で、主君家康を守るために、責めは一手に追う覚悟で、屋敷の周りに薪を積み、いざとなったら火を着けようとする場面がありました。大河ドラマでは井伊直正がその役を担っていました。史実では作左こと本多作左衛門重次、その人であったといわれています。今回、大河ドラマには重次は登場していません。小牧・長久手の戦いも小田原征伐も、史

実では重次は大きな役割を果たしていますが、四天王や大久保忠世、石川数正といった武将ばかりがドラマに出てきて、重次のように徳川の屋台骨を支えた家臣の名はなかなか出てきません。(残念ながら・・・)

わたくしは改めて思います。徳川の世は日本の土台となっていますし、その屋台骨を支えてきたのは徳川宗家であり表舞台に立った人たちの活躍があればこそでしょう。しかしその根底を支えてきたのは、絆に支えられた強き三河武士団であり、名もない家臣たちの惜しまない努力にあったのだと。

先日、六ツ美北中学校の体育大会に出かけ、縦割りの応援・エール合戦と立派な入場行進を拝見しました。また、文化祭の

コーラスフェスティバルにお招きいただき、二十二学級の素晴らしい混声合唱をお聴きしました。城南小学校、北部小学校の卒業生もたくさん活躍していましたが、西部学区から進学した卒業生も躍動し、輝いていました。生徒が精いっぱい気持ちで活躍する姿を見ると、年のせいか涙がこみ上げてきます。この子たちは近い将来、次の世代の日本、六ツ美学区を力強く支えていくことでしょう。時には、名も大切です。しかし、名よりも実を誉に。これからも子供たちを、愛をもって育てていきます。



作左の会 検索